第1章

環境学習の指導を始める前に

1-1　本書の特徴

あいち環境学習ハンドブック（以下「ハンドブック」という。）は、これから環境学習の指導を始めようとしている人たちも活用できるよう、以下の趣旨により作成しています。

1 「愛知県環境学習基本方針の考え方」ってなに？

愛知県環境学習基本方針には、環境問題に自発的に取り組むことのできる能力を身につけるために「出あい、気づきあう」「学びあう」「活かしあう」「つながりあう」という４つの段階を経て発展していく環境学習を推進することが必要であるという基本的な考え方が示されています。この考え方に基づきながらプログラムを展開し（**第２章**）、また、４つの段階の要素が活動事例に含まれています（**第３章**）。

参加者の学習段階、興味、関心に応じて効率的に指導ができます。

◎プログラム…いくつかの活動事例をテーマに沿って組み合わせたものをここでは「プログラム」と定義しています。

2 「環境学習の流れ」ってなに？

プログラムにはテーマに沿った展開や一つのまとまった流れが重要です。

- テーマに沿っていくつかの活動事例を組み合わせます。（**第２章**）

（例）テーマ「森林」

ステップ１- 遊びの要素も織り交ぜ森に**親しみ**ます ➡ **ステップ２**- 森の現状をグループで**考え**ます

➡ **ステップ３**- 森について**調べ**ます ➡ **ステップ４**- 夢の森を描きこれからの**行動**を宣言します

- 一つの活動を、導入・展開・ふりかえりまでの一連の流れで行います。（**第３章**）

（例）森の宝物ビンゴ- 森の中で色々なものをビンゴ形式で探す-（森に**親しみ**ます）

導入- 森に**心を向けさせる**話をする ➡ **展開**- 環境学習の**活動を実施する**

➡ **ふりかえり**- この活動で何を感じたかを聞き出し**全員で共有する**

環境学習の指導がより効果的に展開できます。

◎ふりかえり…体験するだけで終わらないようにするため、どのような体験をしたのか、気づいたことや感じたことは何か、それを、言葉にしたり、表現したりすることなどです。これを集団で行うことを特に「わかちあい」ということもあります。

③「県民、事業者、ＮＰＯ、行政との協働･連携」とはどんなことをしたの？

ハンドブックを使用する人が参考となるような県民、事業者、ＮＰＯ、行政等の協働・連携の事例を掲載しています。

（例）地域と学校が連携して自然体験を行う事例

青年層と中高年層が子ども対象の事業を企画・実施する事例

（このハンドブックは、県民、事業者、ＮＰＯ、行政等がそれぞれのプログラムを持ち寄るなど協働･連携して作成されています。）

「協働･連携」の理念を作成段階から取り入れ各団体や個人の活動をつないでいきます。

このハンドブックにより多くの環境学習指導者が誕生し、その指導者を中心として子どもから大人まで環境学習が広がることを期待しています。

自然の知識を知っていることが指導者の条件？

ある林間学校で子どもたちと森を歩いていたらドングリが落ちていました。リスがドングリを土に埋めて蓄える習性があることを思い出し､｢これ､コナラっていう木のドングリだけど､リスがドングリを食べるのを知ってる？」と聞いたら「そんなこと知ってる知ってる！口にたくさん入れるんでしょ。テレビで見たよ！」と言われ、それ以降の話にはつながりませんでした。

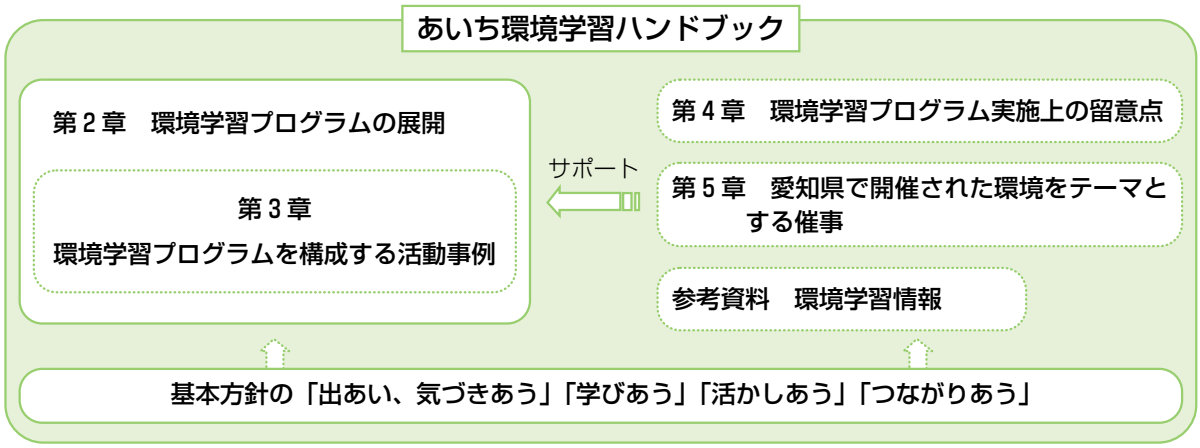
次の日の朝、子どもたちが集まっていました。何をしているのかなと思ってのぞいてみると、鳥の形のような実を囲んで騒いでいました。「ここが頭でさー、ここがくちばし！」「アヒルにそっくりじゃない！」「触ると思ったより柔らかいよー」。そこで、みなで鳥の形や人の顔など生き物に似ているものを探してみようと提案したら、みないろいろなものを発見しこちらから教えることをしなくても自然というものに親しんでいる様子でした。

環境学習の指導者は知識を知っていること、そして、その知識を教えることより、どのように自然に心を向けさせるかがとても大切なんだということを知った日でした。そして、思いました…

「環境学習の指導者になってみようかな・・・」

1-2　本書の構成

本書は、あるテーマに沿ったプログラム（活動事例の組合せと流れ）を示し（第 2 章）、それに関連した具体的な活動事例（第 3 章）、環境学習に役立つ様々な情報等（第 4 章、第 5 章、参考資料）で構成されています。そして、全体として基本方針の「出あい、気づきあう」「学びあう」「活かしあう」「つながりあう」という 4 つの発展段階の要素で貫かれています。



第 1 章　環境学習の指導を始める前に

これから環境学習の指導を始めるに当たって、このハンドブックの特徴や活用方法、指導者として知っておいてほしいことなどを掲載しています。時々は**自己をふりかえりながら読んで理解する**ことにより効果的な指導が可能となります。

第 2 章　環境学習プログラムの展開

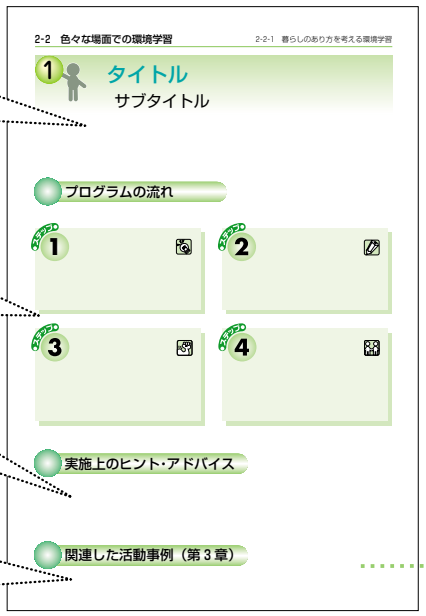
あるテーマに関する「背景やねらい」「プログラムの流れ」「実施上のヒント・アドバイス」「関連した活動事例」の順で紹介しています。特に**特定のテーマを継続的に扱い実施する**時にはこの章は役に立ちます。

プログラムを実施する上で、前提となること、なぜこのプログラムを実施するのか、どんな目的で実施するのかなど背景やねらいを掲載しています。

「プログラムの流れ」…展開方法としていくつかの活動事例をテーマに沿って組み合わせています（「事例紹介」の場合もあります。）。

「実施上のヒント・アドバイス」…効果的に実施するための留意点や注意点、または応用例や発展例などを掲載しています。

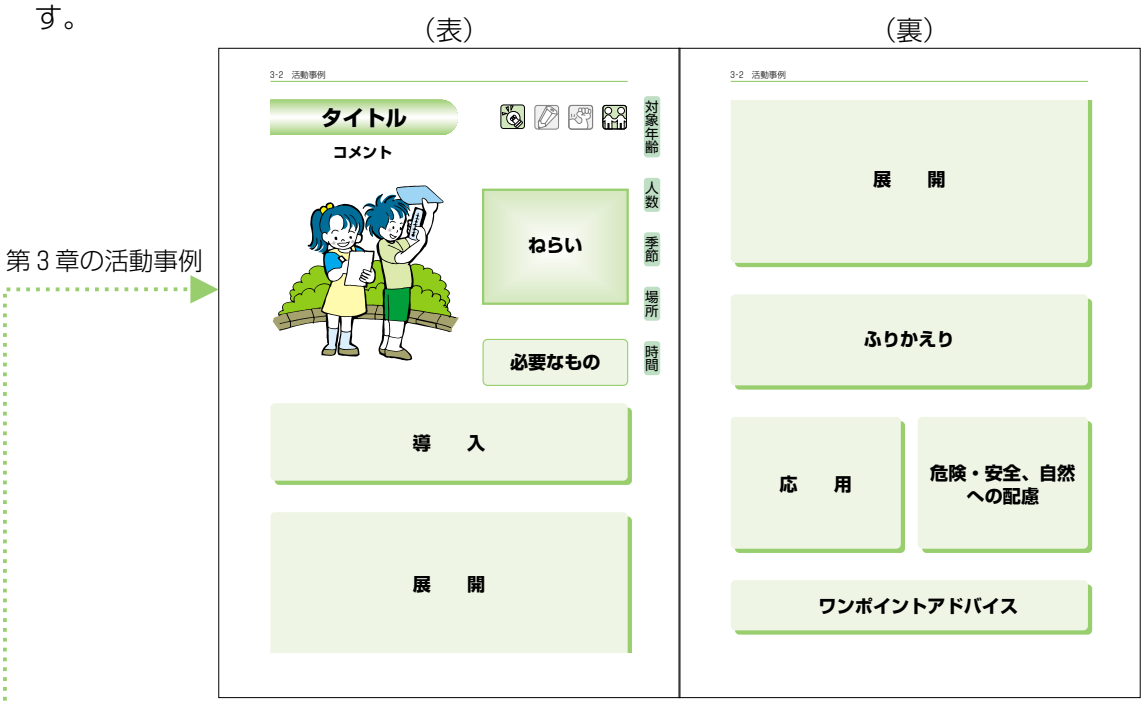
「関連した活動事例」…このプログラムに関連する第 3 章の活動事例のタイトルとページを紹介しています。



プログラムの実施に要する時間は目的、対象、状況などに応じて、数時間、1日、数週間と様々です。展開方法は例示ですので、「2-1プログラムのヒントと作り方」も参考にしていろいろな展開例を考えましょう。

第３章　環境学習プログラムを構成する活動事例

一つの活動の具体的な実施方法です。「**導入⇒展開⇒ふりかえり⇒応用**」の流れになっています。



対象年齢、人数、季節、場所、時間を右側に示していますので目的に応じて辞書のように引くことができます。第2章と関連して実施することも、単独で実施することもできます。実施方法は例示ですので、「3-1活動事例（アクティビティ）のヒントと作り方」も参考に、目的、対象、状況などに応じて、オリジナルの導入・展開・ふりかえりなどを考えましょう。

第４章　環境学習プログラム実施上の留意点

現場での安全対策、フィールド使用のマナー、事業の広報･PRの方法を掲載しています。安全対策とフィールドマナーは下見の段階から確認してください。

第５章　愛知県で開催された環境をテーマとする催事

平成17年に行われた愛知万博とこども環境サミット2005において実施された世界の環境学習や科学技術を中心に紹介していますので、幅広い視点で環境学習を行ったり、考えたりすることができます。

愛知県旭高原少年自然の家

参考資料　環境学習情報

環境豆知識、自然ミニ図鑑、環境学習関連施設等を掲載しています。愛知県内には多くの環境学習関連施設がありますのでぜひ活用してください。

1-3　環境学習Q＆A

Q　環境学習って何？

A　本書では環境「教育」ではなく環境「学習」としています。愛知県環境学習基本方針においても環境学習という用語を使っています。その考えは、他者から教わるという受身の姿勢ではなく自らの興味、意思のもとに自分から学んでいくことが重要だという点にあります。学んだだけで終わることなく、学んだことが次のステップに続くようにしていくといろいろなものがどんどんつながっていきます。

　環境学習とは、自分と、自然と、暮らしとの、様々なつながりや関わりを再発見することなのです。

Q　環境学習の目的は？

A　地球全体で見た場合、環境は改善しているとは言い難い状況にあります。そんな中で、私たちのできることはもうないのではと考える人がいるかもしれません。しかし、できることから始めていくという前向きの姿勢が重要です。私たち一人ひとりが地球環境の問題について、気づき、知ることや考えることを解決のための具体的な行動に結びつけられれば環境学習は成功したといえます。

　つまり、環境学習の目的は、「環境問題の解決」なのです。環境問題解決への一つ一つの扉が、それぞれ「ごみ問題」であったり、「自然」であったりします。自分にとって一番身近なところから入っていけばよいのです。

　もう一つの目的は、環境を守り、育てる行動に主体的に取り組むことのできる「人づくり」です。

Q　環境学習の対象は？

A　環境学習の対象は子どもばかりではなく、大人たちも含みます。多くの問題を抱えているこの地球を、そのまま次の世代に引き継ぎ、問題の解決を子どもたちに任せようという考え方ではうまくいきません。すべての世代が、同じ地球の上に生きている仲間としてともに暮らしや社会を見直しながら、地球とのつきあい方を学んでいく必要があります。そして、同時に指導する側の人も、指導しながら常に「学習」しているということを忘れてはいけません。環境学習は、一人ひとりが、学び、取り組んでいくものなのです。

Q　まず、何をすればいいのでしょうか？

A　できることから、やれることから、身の回りから始めましょう。知識や経験をある程度積むまでは、環境学習のリーダーなんてとてもとてもと思い、なかなか一歩を踏み出せない、という人もいるかもしれません。しかし、活動をしながら自分のものにしていけばよいのです。とにかく、やってみましょう。活動のあとから、経験や知識、自信はついてくるものです。